

10月第3週の礼拝説教

■日 時：2025年10月19日（日）10：30～11：30 聖靈降臨節第20主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：マタイによる福音書25章1～13節（新約P49）

■説教題：「ともし火を整え」

■讃美歌：4（世にあるかぎりのことばをもて）

230（『起きよ』と呼ぶ声、）

今週も、「AI」で録音し文字起こしをして送ってくださったテキストを書き言葉にしています。私の滑舌の悪さと「AI」をお持ちの方が座っている位置が説教壇やスピーカーから少し離れていたために、アドリブで話した導入部がとても日本語とは思えない面白い文章になっていました。それを苦笑いして読みながら、ひどい内容だと自嘲しつつ、主なる神様にそれをお詫びしながら作業をしました。回を追うごとに文字数が多くなっており、冗長さを反省しています。

今週は、日本の国にとって大きな政治上の動きがあるようです。先週ぐらいからメディアでは話題になっていました。そういうことを思いながら、今日の聖書箇所であるマタイによる福音書25章1節から13節を読んでいました。この箇所で、主イエスは「天の国」をたとえておられます。私はかつてこの箇所を読みながら「私自身も終活をしなければ」と真剣に考えて実行していた時期があったことを思い出しました。仙台にいたときのことです。初めて全身麻酔を用いての手術をすることになりました。もしも、手術後に目覚めなかつたら、判断力が戻らなかつたらなどと、悲壮な思いになったのです。最初に10年日記を処分しました。それに続いて、過去に活字になった文章や保存してあった原稿などを処分しました。結局、手術後も何事もなく元の生活に戻りました。そして今、高齢者と呼ばれる年齢になりましたし、立川教会を2026年3月で辞任し、牧師としての歩みも隠退すると決めましたので、やはり本格的に終活をしなければならないと、強く思われています。また、終活と直接の関連はないのですが、かなり早い時期（2000年ぐらい？）から、夫と二人で、所有している本を処分し始めました。藤枝教会時代は本を所蔵するスペースがあつたので、所有冊数が1万冊ぐらいになりピークでした。そこで、私の所有の一般書やコミックなどから始め、1000冊ぐらいを処分しました。仙台に転任してからは、教会が東北大学の近くにあるので、専門書を扱う古書店が近くにあり、処分は本格的に進みました。福島に赴任してからは、神学書を親しい牧師たちや神学生たちに差し上げました。その結果、立川教会に来るときには4000冊ぐらいになっていました。立川に来てからはさらに絞り込んで処分し、夫が自身の所蔵本を神田神保町にそうとう運んだこともあり、1500冊ぐらいになりました。そういうわけで、我が家は終活をするといつても足手まといになるのは本だけなので、それを処分しながら自分たち自身の終わりを見つめることをしています。

さて、本日の聖書箇所にまいりましょう。主イエスが「そこで、天の国は次のようにたとえられる。」と語り出されて始まっています。マタイによる福音書で主イエスがたとえ話をなさるときによく用いられている表現です。すでに取り上げた箇所にも同じ表現が出てきましたし、本日の箇所の次の段落の「『タラントン』のたとえ」もまた、「天の国はまた次のようにたとえられる。」と書き出されています。マタイによる福音書の24章からは、いわゆる世の終わりとキリストの再臨のことについて記されています。ですから、本日の箇所のたとえ話も同じように、世の終わりとキリストの再臨の時のこと、主イエスが語っておられるということができます。日本でも一時期、「終末論」という言葉が世

の終わりについての考えのように受け止められ、独り歩きをしていた時期があります。また、新興宗教などは、世の終わりとは非常に恐ろしい裁きの時なのだから、そこから救われるために信心をしなさい、と常に呼びかけています。しかし、主イエスの語られる世の終わりとは、同時に天の国、神の国が現れる時であるとも考えられるのです。しかも、本日の聖書箇所では、天の国が結婚のお祝いの時にたとえられています。それはイエスという花婿を迎える喜ばしい出来事なので、クリスマスを迎えるアドベントの時期などにもよく読まれ語られる箇所でもあります。

本日のたとえ話では、花婿を迎えて行った十人のおとめが登場いたします。ある方はこの箇所を初めて読んだときに、十人の花嫁が十人の花婿が来るのを待っている、いわゆる集団結婚式の様子であると勝手に思い込んでしまったそうです。そのころ、ちょうどキリスト教系を標榜するカルトの主催する合同結婚式が話題になっていたので、このたとえ話が関連しているのではないかとさえ思ったそうです。しかし、実はこの十人のおとめというのは花嫁のことではありません。花嫁の友人たちで婚礼の手伝いに来ているのです。花婿の元の言葉は单数形になっていますので一人です。花婿を迎えるための手伝いをする十人のおとめと花婿一人、そういう構図でたとえ話が語られています。昔のイスラエルでは、婚礼は村を挙げてお祝いをしたようです。ヨハネによる福音書の2章に、主イエスがなさった最初の奇跡としてカナで行われた婚礼の出来事が記されています。主イエスは、大きな水がめ六つの水をぶどう酒に変えるという「最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。」とあります。それほどたくさんのがめのぶどう酒を必要とするほど多くの人が集まり、会食をしながら何日も続いたのです。その婚礼の祝いの前に、まず花婿が花嫁の家に行って前祝いがなされたそうです。その時のことが本日のたとえ話の背景にあります。そして、婚礼会場の家で花婿を迎える役をするのが花嫁の友人たちでした。このたとえ話では、そのおとめたちが十人いたと語られています。当時は、女性は10代半ばで結婚するのが一般的だったですから、彼女たちも同年齢だったのでしょう。ですから、楽しくおしゃべりしながら待っていたのかもしれません。本日の聖書箇所は、その婚礼の出来事を描きつつ、婚礼の準備をする十人のおとめたちに焦点を当てています。

時は夕方、十人のおとめたちは持っていたともし火をつけて、花婿を迎えて出るためにその到着を待っていました。当時は、ともし火皿と呼ばれる陶器の器に油を入れ、芯を浸し火をつけて明かりにしたわけです。ところが、花婿が来るのが遅くなりました。夜ですから、皆、眠たくなって眠り込んでしまったのです。ここでは「皆」と言われていますから、一人も起きている人はいなかったわけです。ともし火だけはかろうじて少し灯っていたのかもしれません。すると、真夜中になってようやく花婿が到着しました。それで、彼女たちは起こされてともし火を確認すると、十人のうちの五人のともし火は油がなくなりつつあり消えそうになっていました。それが「愚かなおとめたち」と呼ばれている人たちです。一方、予備の油を用意していたのは他の五人のおとめたちでした。小さな壺に油を入れて持ち歩いていたと考えられています。彼女たちは「賢いおとめたち」と呼ばれています。聖書の中で主イエスがたとえ話をするのに、「愚かなおとめたち」と「賢いおとめたち」と言い差別をするのか、と批判的に考える人たちもいます。愚かなおとめたちが賢いおとめたちに「油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。」と頼みますが、賢いおとめたちは、「分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい」と答えていました。一緒に待っているのだから、そういう意地悪などせずに、自分たちの持っている油を少しづつ分けてあげれば、皆で仲良く出迎えて喜んであげられるだろう、普通はそのように考えます。その方が婚礼にはふさわしいのではないか、とも思います。夜中に油を売っているようなところが果たしてあるだろうか、

とも思うのです。けれども、これは主イエスが語られたたとえ話なのです。一般論的に考えるといろいろな疑問点ばかり生じてしまうかもしれません。

やがて、「愚かなおとめたち」は油を買って戻ってきました。ところが、もう花婿がやって来てその家の戸は閉められていきました。ですから、「愚かなおとめたち」は、戸を前にして「ご主人様、ご主人様、開けてください」と呼びかけたのです。それに対して、家の主人は戸を開けないどころか、「はっきり言っておく。私はお前たちを知らない」と答えています。そんなに厳しいことを言わなくとも、一緒に婚礼のお祝いをしよう、と言って戸を開けてあげたらよいのではないか、どうしてそのように厳しく冷たい裁きの言葉を言うのだろうか、と私たちは考えます。確かに、「愚かなおとめたち」は予備の油を用意していました。彼女たちの側に立てば、花婿の到着が遅れたのが悪いのであって、自分たちはそんなに悪いことをしているという思いはないと考えていたのかもしれません。けれども、この家の主人からは「はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない」と突き放されました。この厳しさには、私たちも何か理解できないものがある、と思わせられるところです。

ところで、このたとえ話は、主イエスの「だから目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」という言葉で締めくくられています。けれども、直前の主イエスのたとえ話では、愚かなおとめたちも賢いおとめたちも両方とも眠り込んでしまっています。どちらも目を覚ましていることはできなかったわけです。それなのに、主イエスが「だから目を覚ましていなさい」と注意なさるのは矛盾するのではないかと思ってしまいます。そこで、私たちはこのたとえ話が一体何を語っているのかということを真剣に見つめなければならないと思います。ここでは、天の国あるいは花婿の到来というのは、実はキリストの再臨ということを巡って語られているということを考えなければなりません。マタイによる福音書は、この後の 26 章 27 章 28 章で、主イエスが十字架の死を経て復活されることを語り、弟子たちを宣教のために派遣されるところで終わっています。しかし、私たちは、その後の主イエスが昇天し、父なる神のところにお帰りになったことを、聖書の他の箇所で知っています。そして、その主イエスが再びこの世にお出でになるのがキリストの再臨と言われている出来事です。それは同時に、世の終わり、終末というようにも考えられます。本日の聖書箇所が、「あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」と締めくくられているように、キリストの再臨がいつ来るかということは誰も知らないのです。前のページの「目を覚ましていなさい」という見出しの段落も、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ父だけがご存知である。人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。」という主イエスの言葉で書き出されています。「父」とは父なる神です。すべてのことは父なる神だけがご存知である、と語られているわけです。間もなく、イエス・キリストが再臨すると声高らかに叫んで、多くの人を集めた新興宗教はかつても今もあります。けれども、人間が考えるのは、所詮、人間の考える時に過ぎません。人間が考えるよりも大幅に遅れるかもしれないし、早まるかもしれないのです。そうすると、私たちはどのようにしてキリストの再臨を待っていればよいのか、ということが問題になります。本日のたとえ話で言えば、「賢いおとめたち」たちは、何か事情が生じて花婿が遅れるかもしれないと考えて、遅れた時のために油を用意していました。一方、「愚かなおとめたち」は、私たちは言われた通りにともし火を持って迎えに行けばよい、と単純に考えたのでしょうか。そこが、このたとえ話を私たちが聞くときの分かれ道になっているのではないか、と思います。

そうすると、この「油」とは何をたとえているのかが問題になってきます。「愚かなおとめたち」が「賢いおとめたち」に向かって「油」を分けてくださいと頼んだのに、賢いおとめたちは「分けてあげるほどはありません」と答えていました。そうすると、「油」とは分けることができないものである、とも考えられます。それは何かというと、主イエス・キリストを信じる、神を信じる、という信仰に関する事であると考えることもできます。あなたに私の信仰の「油」を分けてあげる、そういうことはできません。あるいは、聖霊は私たち一人ひとりに注がれるので、私に注がれた聖霊をあなたに少し分けてあげる、と言うこともできません。そのように考えてくると、信仰や聖霊は、その人のみに与えられている神からの賜物であって、「私には信仰がないから、あなたのをちょっと分けてください」と言わされた時に、「はい、分けてあげましょう」と親切に分けてあげることができないものだということがわかります。聖書では、「油」とは神のくださる賜物を指していることがあります。例えば、ヨハネの手紙一2章20節に、「あなたがたは聖なる方から油を注がれているので、皆、真理を知っています」と記されています。そうすると、油を用意していたおとめたちは、神のくださる賜物、神の恵みに生きているということを表していると言えるでしょう。私たちも同じです。私に与えられた賜物を誰かに分けてあげようとしても、分けてあげることができません。そこで私たちができるのは、どうぞ、の人たちにも神の賜物が豊かに分け与えられるように、あるいは、聖霊が豊かに注がれるように、と祈ることだけです。

最後に注目したいのは、愚かなおとめたちを婚姻の席に招き入れなかつたこの家の主人の冷酷なまでの厳しさです。本来、私たちは皆、神から「はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない」と言われて、天の国の扉を閉ざされても仕方がない者だ、ということを忘れてはならないと思います。けれども、そのような私たちが天の国に入れるようするために、主イエスは十字架に架かってくださいました。そして、私たち一人ひとりのために贖いをしてくださったというのです。それがキリスト教の教えの中心であり信仰の中心です。主イエス・キリストだけが、私たちに分けてくださる賜物を十字架上でお持ちになっておられるのです。言い換えれば、本来ならば天の国に入れていただく資格のない私たちに「油」を用意してくださり、「賢いおとめたち」としてともし火を整えさせてくださるために、主イエスは十字架にかかるてくださったのです。そして、その「油」を買う場所はどこか、言い換えれば「油」をいただける場所はどこかと言えば、それは礼拝であると私は思っています。

私たちは、日曜日の主日礼拝に教会に集ってきます。何のために、毎週日曜日に時間を割いてそのようなことをするのでしょうか。実は、この礼拝で私たちは神からの賜物である「油」を注がれているのです。あるいは、「油」を主イエスから分けていただいているのです。その「油」を用いてともし火を整えなければ、主イエス・キリストの再臨に与することはできません。そのことを深く信じて、いつ主イエスが再臨されてもよいように、自分自身のともし火を整えて待ち続けていきたいと思います。

お祈りをします。

主なる神様、主イエス・キリストは私たち一人ひとりのために十字架にお架かりになり、そして、私たち一人ひとりを救うために油を分けてくださるお方である、そのことをいつも信じています。その油を分けていただきともし火を整えて、主イエス・キリストの再臨を心から待ち望むものになりたいと思います。どうぞ、私たち一人ひとりに力をお与えください。この祈りを主イエス・キリストのみ名によっておささげいたします。